

関西万博の自然観

片野修

関西万博の環境問題

関西万博が大盛況のうちに閉幕したが、一方でこの万博は何をめざしたのか、よくわからなかった。「いのち輝く未来社会のデザイン」というのが、テーマであったけれども、その具体的な中身は何だったのだろうか。サブテーマは、「いのちをつなぐ いのちを救う いのちに力を与える」であったのだが、この場合のいのちとは何をさすのだろうか。

この疑問を感じたのは、ユスリカ問題があったからである。関西万博の会場では、5月14日頃からユスリカが大発生して群舞することが問題になった（関西万博運営統括室・施設維持統括室 2025）。とくに大屋根リングの周辺や噴水ショーが行われるウォータープラザ周辺で多かったらしい。ユスリカは双翅目の昆虫であり、水のあるところで幼虫時代を過ごし、羽化して成虫になったのち交尾して卵を水場に産む。大発生したのは、一斉に羽化して成虫になったユスリカであろう。

ユスリカの幼虫は多くの魚類の食物として重要であり、アカムシとして釣りの餌にも重宝されている。水中では、ユスリカが活動することによって水質が改善することが明らかになっている（近藤ほか 2001）。羽化しても人を刺すことはないので、蚊やアブやブユのような害虫ではない。水田や小川のほとりでユスリカが群舞していると、心が浮き立つような高揚感を覚えるものだ。

ところが、このユスリカの群舞を見た観客から、気持ちが悪いというクレームが殺到した。マラリアを媒介するという誤情報まで飛び交ったらしい。大阪府はアース製薬などに協力を要請し、薬剤によって死滅させる対策を講じた（石田 2025）。無害だけれども気持ちが悪い生物は抹殺するというのが、「いのち輝く未来社会のデザイン」だということが明らかになった。このときに用いられた薬剤がどのようなものなのかはわからないが、多量に吸い込むと人間にも有害である可能性がある。仮に人間には無害であっても、昆虫類は殺傷させるということになる。つまり、いのち輝く、いのちをつなぐ、いのちを救う、いのちに力を与えるというのは、あくまでも人間だけに対してあてはまるわけで、その他の生き物は除外されることになる。

ユスリカの種類について正確なことはわからないが、汽水域に生息するシオユスリカが多かったらしい。淡水だろうが汽水だろうが、水たまりができればすぐにユスリカは産卵し、その幼虫が泥の中で増えるのは、生態学者であれば常識である。つまり、新しい水場をつくった関西万博でユスリカが大発生することは、事前に予想できたことである。それが予想できなかったのは、関西万博の組織委員会やブレインに生態学を理解する学者がいなかったからである。

おりしも、関西万博開催中に8歳の男の子が目撃された（Hint-Pot 2025）。彼の名前は木

下湊太君。その夢は「殺虫剤のない世界をつくること」であり、コバエ専用の捕獲器を発明した。虫が苦手な母を助けるために、傷んだ野菜と生きたカマキリが入ったペットボトルには、コバエが通れるサイズの小さな穴が複数開いており、ペットボトルに入ったコバエはカマキリに捕食される仕組みになっている。



解体中の関西万博会場

殺虫剤や農薬が環境を汚染し、水田のドジョウをはじめとする多くの動物が姿を消したことは、いまだに多くの人の記憶に残っている。その反省から、農業における農薬の使用量は減り、生物多様性も復活しつつある。そういう認識が関西万博には欠如していた。さらに、5月28日には、静けさの森の人工池から、6月4日にはウオータープラザの海水から、国の指針の20倍のレジオネラ菌が検出された（読売新聞 2025）。この検出については異論もあったようだが、いずれにしても水質が悪かったことだけはまちがいない。その結果、これらの水を利用する一部の施設は使われなくなった。最終的に何百億もの利益を生み出した関西万博で、水質浄化も考えなかったのは、この組織委員会が経済のことばかり考えて、環境を軽視していたことを証明するものである。

ユスリカの発生については、空中の殺虫剤と水中の成長抑制剤を投入したようだが、空中のユスリカはいずれ寿命が尽きて死滅するので放置しておけばよい。水中ではユスリカを捕食する魚をあらかじめ放流しておけば、ユスリカを食べつくしてくれたであろう。この点は他の識者も指摘している（伊東 2025）。公園や寺社の池では、餌の少ない環境で錦鯉や金魚が必死に底を漁っている。関西万博では、コイや金魚のほか、塩分濃度によっては海産魚を利用する方法もあった。各地で養殖されている魚を用いれば、選択肢はいくらでもあっただろう。魚の放流に合わせて水質浄化装置を備えるとともに、鳥による捕食を防ぐロープを張っておく必要もあったかもしれない。もっとも、自然の鳥がやってきて万博の水辺にいることは、悪いことではない。

自然との向き合い方

WWF ジャパンは、関西万博は生物多様性保全への貢献義務があるとしている。その根拠は、「持続可能な大阪・関西万博開催にむけた方針」および「持続可能な大阪・関西万博開催にむけた行動計画」において、生物多様性を保全すること、沿岸域における生態系ネットワークの重要な拠点として、会場内の自然環境・生態系の保全回復に取り組むことを謳っているからである（WWF ジャパン 2025）。

関西万博が開かれた夢洲は大阪湾に造成された 390 ヘクタールの人工島であり、埋め立ての途上で広大な水辺環境が広がっていた。具体的には、絶滅危惧種 51 種を含む鳥類 112 種や絶滅危惧種および重要種 12 種を含む植物 206 種が確認されている。万博の大屋根リングの外側に広がる「つながりの海」はその一部であるが、長年シギやチドリなどの渡り鳥を含む野生生物のすみかとなっていた。このエリアの環境保全について、WWF ジャパンのほか、日本野鳥の会、日本自然保護協会、大坂自然環境保全協会などが「大阪湾岸に生物多様性豊かな干潟や湿地をとり戻すための共同宣言」を提案しているが、関西万博の跡地利用を含めて、明確な回答はない。それどころか、2025 年 2 月に「夢洲第 2 期区域マスタープラン Ver.1.0（案）」が公開され、つながりの海を埋め立てる方針が発表された。すなわち、生物多様性を尊重するという方針は建前だけのものであり、それが万博内部における生態系の軽視や薬剤の散布にもあらわれたとみなすことができる。

この点で 1970 年に開催された大阪万博と関西万博は性格を異にするといっていよう。大阪万博では、丹下健三や岡本太郎が設計・企画を担当し、そのアドバイザーとして、当時の大阪を中心とした優れた文化人や学者が携わっていた（平野 2018）。とくに作家の小松左京や文化人類学者の梅棹忠夫は、一流の生態学者であった吉良竜夫や森下正明と深く交流し、生態学を理解していた。その結果、万博の跡地には、自然観察学習館 moricara を含む自然文化園がつくられ、そこでは現在でも生物多様性を学ぶことができる。コンクリートで固められた万博会場から森や小川を再生しようとする試みは画期的であり、現在では立派な森が再生され、小川にはホタルやアカガエルが生息するようになっている。

また、2005 年に開催された愛知万博では、希少種であるオオタカの営巣が見つかったことから、計画を大幅に変更・縮小することになり、それが評価を高めることになった。

一方、関西万博では、誰がベイシックな企画・構想を練ったのかがよくわからない。日本国際博覧会協会が準備を担ったと思われるが、その会長、事務総長、理事などは、主に経済人と政治家によって占められていた。万博のプロデューサーは森下竜一という人だが、大坂維新の会のブレインで、医学関連の人らしい。会場のデザインや運営は建築家やプランナーが決めたようだが、全体的に学者の影が薄く、生態学を理解するものがいなかった。現在の関西には、梅棹忠夫や岡本太郎に匹敵するインパクトのある文化人はいないのだろう。



大阪万博記念公園における森の再生

万博跡地の利用と未来

結局、関西万博の周辺で自然保護の動きは見られない。隣接した埋め立て地はカジノに利用される予定であり、万博跡地の詳細は決まっていないが、ホテルや商業施設などが予想されている。万博というのは、そもそも開催期間が終わると、ほとんどの建造物を取り壊されるのであるから持続的ではない。大阪湾の埋め立て地はかなりの速さで地盤沈下しており、土地自体も持続可能であるか疑問である。埋め立てに用いる土砂から有害物質あるいはマイクロプラスチックが流出する恐れもある。スローガンの「いのち輝く」は人間だけが輝くという意味であったが、カジノにおぼれて身を亡ぼす者が出ることを想うと、輝く人間も一部の富裕層に限られるのではないか、という疑問を打ち消すことができない。同様の懸念は森林文化協会の森本幸裕（2025）によっても表明されている。

自然や生物多様性はとりあえず考慮せずに、多くの利益と集客だけを考えたと言うのなら、それはそれで一つの主張として理解できないことはない。しかし、万博の誘致や計画において、生物多様性を保全すること、沿岸域における生態系ネットワークの重要な拠点として、会場内の自然環境・生態系の保全回復に取り組むことを謳ったのは偽りであったことになる。自然との調和は今ではグローバル・スタンダードになっているので、それに言及することなく万博の開催を勝ち得ることはできなかったけれども、実際には大阪湾を次々に埋め立てて利益をあげたいというのが本音だったのだろう。埋め立てには経費がかかるから、利益第一に考えたいのは理解できるとしても、自然団体の要望を聞いたり、少しでも生物多様性に配慮したりする姿勢がほしかった。関西万博の展示の中には、自然や環境に配慮し改善する取り組みも多かったと推察されるが、それらがユスリカ問題や跡地利用の方針によって台無しになったような気がするの残念である。

なぜ自然環境が重要かといえば、人間も都市も自然環境の中でしか生きられないからである。海に囲まれた埋め立て地で、人間のことだけを考えると、ユスリカの大発生よりも深刻な環境の異変にさらされることになりかねない。植物が乏しいコンクリートだらけの埋め立て地は灼熱の太陽にさらされ、思わぬ害虫に襲われ、蓄積し続ける環境汚染物質に被害を受ける恐れがある。ユスリカの発生やレジオネラ菌の増殖すら予想できないようでは、自然との調和ある社会も持続的な未来も築けないと思われる。

大阪湾では名産であるイカナゴが記録的不漁になっている。その原因かどうかは不明だが、大阪湾の水質は改善されておらず、毎年赤潮が発生している。関西万博ほかの埋め立てに必要な土砂を、大阪湾の海底 21 か所から、総容積で約 3200 万 m³も掘り出しているのも、方々に窪地がつくられている(大阪府 2025)。

関西万博と直接関係していないが、大阪府内では各地で有機フッ素化合物による汚染も報告されており、地下水や住民の血液が汚染されている(朝日新聞 2025, 2026)。淀川下流のシジミからは、基準の 7 倍もの貝毒が検出された(国土交通省 2026)。大阪南港につくられた「大阪南港野鳥園」はシギ、チドリなどの野鳥の重要な生息地であったが、年々鳥の数は減少している。その名称は「野鳥園臨港緑地」に変えられ、管理事務所が閉鎖され、レンジャーが常駐しなくなるなど、その将来が危ぶまれている。先に述べた大阪万博跡地につくられた自然文化園では、施設の老朽化が進むにもかかわらず予算が削られており、ホテルやアカガエルの生息が危機に瀕している。さらに、大阪の希少魚として守られてきた天然記念物のイタセンパラは、市民団体や大阪府生物多様性センター(かつての淡水魚試験場)の努力によって、淀川ワンドで復活したけれども、最近ほとんど確認されなくなっている(大阪市旭区 2025)。

このような状況が関西万博とどう関係しているのかについては、今後の検討が必要であるが、大阪市と大阪府による経済最優先と自然軽視の姿勢が続き、自然や環境についての予算や人員が削られているとすれば、危ういことだと警鐘を鳴らしたい。

引用文献

朝日新聞(2025) [PFAS 検出で公害調停申請へ 大阪・摂津の住民がダイキン相手に：朝日新聞](#)

朝日新聞(2026) [PFAS 濃度、26 都府県の川や地下水で指針値超 すでに各地で対応 \[PFAS 問題\]：朝日新聞](#)

Hint-Pot(2025) [夢は「殺虫剤のない世界」 夏休みの自由研究、8 歳少年の"発明"が反響「めっちゃ優秀」「何者ですか」 | Hint-Pot - \(2\)](#)

平野暁臣(2018)「太陽の塔」新発見。青春出版社

石田耕一郎(2025) [万博ユスリカ駆除で殺虫スプレー？ 本当にまいたかファクトチェック \[大阪府\] \[大阪・関西万博 2025\]：朝日新聞](#)

伊東乾（2025）大阪万博で大量発生中のユスリカ対策、実は殺虫剤より効果的な小魚 1950年代に八丈小島で奇病「バク」を根絶したそのパワー(1/3) | JBpress (ジェイビープレス)

関西万博運営統括室・施設維持管理局（2025）大阪・関西万博会場におけるユスリカの大量飛来についての現状と対策状況 | EXPO 2025 大阪・関西万博公式 Web サイト

国土交通省近畿地方整備局（2026）淀川下流域のシジミから規制値を超える貝毒が検出されました。～シジミを採取して食べないでください。加熱しても毒はなりません。～ | 国土交通省近畿地方整備局

近藤繁生ほか共編（2001）ユスリカの世界。培風館

森本幸裕（2025）大阪・関西万博のユスリカ騒動～「静けさの森」を「にぎやかな森」へ グリーン・パワー - 森林文化協会

大阪府環境農林水産部（2025）大阪湾（大阪府）における総量削減の現状と課題。
000298497.pdf

大阪市旭区（2025）

http://www.osaka-nankou-bird-sanctuary.com/o.n.b.s_web/top_cont/mail/mastermail.htm

WWF ジャパン（2025）大阪・関西万博における自然環境保全上の課題について | WWF ジャパン

読売新聞オンライン（2025）大阪万博:万博レジオネラ属菌、静けさの森の人工池からも…しぶき吸い込むと肺炎の恐れ：読売新聞